

## 第 1 回から第 4 回までの各委員の主なご発言

### ○研究を実社会へ役立てるための取組み

#### 1 研究の社会実装化とそれをバックアップする仕組み

##### 1.1 研究と実社会のマッチング

###### 1.1.1 防災に関するニーズを収集し研究とマッチングするための取組み

- ・ 科学研究と防災ニーズとの結びつきについて体験したが、これを組織的に得るのは非常に難しい
- ・ 入口の研究者は社会等の要請を考えなければならないと感じている
- ・ 女性や障害者のような特殊なニーズを持っている人の視点からの分析が進んでいないのではないか

##### 1.2 予測・観測から住民の行動までの一貫通貫

###### 1.2.1 学術分野間の連携や学際研究による総合的な視点からの防災・減災研

###### 究を推進する取組み

- ・ 予測の研究と、予防のための研究と、災害対応のための研究が少し繋がっていないので、これを繋げないといけない
- ・ 学問は特に 19 世紀から 20 世紀にかけて分化、専門化していく方向で進んでいるが、防災・減災の問題に対応しようとする、逆に統合する方向でなくてはならない
- ・ 学際研究が特に防災分野では極めて重要

###### 1.2.2 研究成果が国や地域の防災・減災対策へ活かされる取組み

- ・ ハザードを予測した際、それに対応する災害の予測があり、それに対応する対策が一貫通貫であるべき
- ・ 防災に関する知識と行動の間には大きな乖離があり、それをどうすれば埋めていけるかを考えていくべきではないか
- ・ 実際に対応する国、県、地方自治体の防災担当は、あまり研究のことを知らない
- ・ アメリカの FEMA のように両者（行政と研究者）をマネジメントするような機能というものが必要であり、それを仕事としてやるような部分が国には必要なのではないか
- ・ 発生の確率が高いけれどもリードタイムが短い情報と、確率は低いけれ

どもリードタイムが長い情報について、それぞれの特性を考慮した上で施策に活かすための議論が不足しているのではないか

### 1.2.3 防災・減災研究や対策が国民の行動に繋がる取組み

- ・例えば避難勧告等が空振りに終わった場合、なぜこのような事態になったのか、なぜこのような対応を取ったのかという検証や住民への説明をやっておらず、このことが防災実務の信頼性を落としている原因になっているのではないか
- ・国民のコンセンサスを得るためには、業界の人にしかわからないような言葉を使うのではなく、もう少しわかりやすいものにする必要がある

## 1.3 研究の社会実装化をバックアップするための制度・社会システム

### 1.3.1 継続的に研究を行うための仕組み

- ・実証実験や社会実装を目的とした研究はほとんどが単年度あるいはそれに近い研究機関になっているが、実際のところは、社会実装に関する研究にも時間がかかる
- ・発生間隔の長い現象に関しては、継続的に研究を応援することを政府は考えてほしい

### 1.3.2 最新の科学技術を積極的に活用するための仕組み

- ・将来を予測できるある程度の知見を持っている科学技術を入れていかないと、とても防災とか減災ができないという意識を持ち始めた

### 1.3.3 防災・減災のための先行投資の仕組み

- ・災害が起こる前の先手を打った研究をどのように実用化するかということを考えていくべきではないか。災害対策基本法は災害後の事後対応が主となっており、防災・減災のための先行投資をどうしていくかという実装が法律的にも不十分ではないか
- ・我が国には事前対策を進めるべきことが多いが、資源は限られている。現行制度ではこれらに優先順位をつけることが難しく、事前対策が手遅れになりがちである。悲惨な災害後の復旧復興には反対者が少なく、対策は事前より事後に偏ることになる。

### 1.3.4 “研究を社会に役立てるための研究“に対する評価の方法

- ・学問は特に19世紀から20世紀にかけて分化、専門化していく方向で進んでいるが、防災・減災の問題に対応しようとする、逆に統合する方向でなくてはならない。しかし、それを評価する枠組み、進める枠組みは無い
- ・研究を社会実装するためには、研究者としての好奇心を満たす、評価につながる等、動機につながるような仕組みも必要ではないか
- ・基礎研究と実用化の間にはかなり大きな溝があり、基礎研究を実用化で

きるような評価制度が必要ではないか

## 1.4 研究結果の情報集約・活用

### 1.4.1 分野を超えた研究成果等を共有するプラットフォームの整備

- ・ 大量のデータをアーカイブしておき、それを常に利用するための、一定規模のストレージがあり、それを最先端のIT技術でサポートすることが重要ではないか

### 1.4.2 プラットフォームを活用するため仕組み作り

- ・ プラットフォームを訪れた人がイノベーティブな配慮をできるような仕組みを作っていくべきではないか
- ・ 統合的なデータ基盤を効果的に用いて包括的な理解をした上でコミュニケーションされる場を作ることが重要ではないか

## 2 研究者の役割

### 2.1 防災関連研究における責任とリーダーシップ

- ・ 防災関連研究のリーダーシップは防災を職業とする人がとらないといけないのではないのか
- ・ 社会実装の担い手については、大学のようなある程度ローカルなところで実践しなくてはいけないのではないのか
- ・ 火山の分野におけるホームドクターのような、研究を社会還元する担い手が不足しているという話があったが、例えば参勤交代みたいに、研究者の一部を1年ごとに現場の国民の皆さんの命を預かる最前線で働く制度を作れば、自覚も増し、その後の研究の質も違ってくるのではないのか

### 2.2 社会や国民への啓発

- ・ 経済の力に押されて、渋谷・大手町・六本木などで建物が高層化されている。東京一極集中は行き過ぎであるなど、エンジニアも市民も耳障りの悪いことに対して聞く耳を持たないが、こういうことをやめようと言う必要がある